

つるおか新図書館基本構想企画懇話会 第1回議事概要

1 会議概要

- (1) 日時 令和6年7月22日(月) 午後1時30分～3時30分
- (2) 場所 鶴岡市役所別棟2号館21～23会議室
- (3) 出席者 (略)

2 会議次第

- (1) 開会
- (2) 挨拶 市長、教育長
- (3) 議題
 - ① セッション1 「図書館とは」
 - ア 報告
 - a 「図書館の基礎知識—今、図書館に求められているもの—」 山崎博樹氏
 - b 「NY図書館視察状況」 教育長 布川敦
 - イ 質疑
 - ② セッション2 「本市の図書館で大事にすべきこと」
 - ア 説明
 - a 中心市街地将来ビジョンについて
 - b 懇話会について
 - c 本市図書館での取組み
 - イ 意見交換 ※ 敬称略
- (4) コメント
- (5) 閉会

3 発言要旨

※ 敬称略

(1) セッション1 「図書館とは」

(委員) この会議は、建物あるいは場所については、話をしなくていいのか。どういう図書館でやりたいかを議論する場として考えればいいのか。

(副市長) この場では図書館の機能として話していただき、こんな図書館であればという皆さんお考えをお聞きかせいただきたい。

(委員) 山崎先生のお話を伺って、子供たちが本を読まないというので、子供と普段接する機会の多い親世代は、本を果たして読んでいるのかどうか疑問に思った。どのような仕掛けがあるか。

(山崎) 「家読(うちどく)」という言葉がある。家の中で親子が本を読むことで読書習

慣を共有するという取組だが、図書館ではそれをうまく利用して「家読パック」などを作った。また、親子が来館しやすいように親世代が来る仕掛けが必要であり、例えば、子育ての情報を児童書の棚に置くなどの工夫なども考えられる。

(2) セッション2 「本市の図書館で大事にすべきこと」

(副市長) 委員の皆様の方から発言いただきたい。

(委員) 郷土資料館には、鶴岡市の大事な史料が保管されているが、購入予算が少なく、古文書が他所に散逸するという現象が起こる。予算を拡充し、展示方法も親しみを持ちやすく、敷居を低く工夫ができる図書館を望みたい。

(図書館長) 最近、家じまいなどで、古文書が当館に提供されるケースが多い。また、古書店で購入できる貴重な史料は、予算の範囲内で、なるべく逃さず、収集に努めている。展示で親しみやすさは考えていきたい。

(委員) 勤務している学校では古文書を常に授業で取り扱っていて、AI を使って崩し字を読めるアプリを取り入れて読んでみたり、実際の古文書も阿部久書店から見せてもらった。実物を見せないと子どもたちが接する機会もない。昨年度、小学校に提案したが、学校現場は忙しいようで、出前授業組み入れられないと言われた。今後、図書館の機能の一つとして、検討してもらいたい。

(委員) 山崎先生が示された図書館の3つのアセットは、図書館の要素が3つに分解でき数式で示せるのは面白い。実際に、新図書館基本構想の中で、どこに課題を感じ、改善したいのか。建物か、アクセスなのか、資料を拡充したいのか、人の仕組みを変えたいのか、特にどこを改善したいのか伺いたい。

(図書館長) 3つのアセットで、それぞれ課題はあるが、「建物」については手狭であることが挙げられる。駐車場のスペースとか、利用者の方から見えない収蔵スペースが限界にきている状況である。「資料」については、閉架書庫に多くの資料を所蔵しているが、開架スペースが制限されている状況で利用者の見える場所には置けていない。「人」については、子どもや高齢者の方の利用が多い反面、現役世代の利用が少ない現状がある。そういった課題を共有しながら、解決の方向性を考えていきたい。

(副市長) では、「鶴岡市の図書館として大事にすべきこと」とのテーマで、ご意見をいただきたい。

(委員) 小学校の読書支援サークルで読み聞かせの活動をしている。図書館は思い出の場所になれることが一番と思った。なぜ図書館に行きたいかを振り返ってみると

どんな時でも、年代でも、季節でも、いつでも寄れる場所であってほしい。自分の子供が高校生の時、図書館に行くと言われただけで、何となく安心した気持ちと、背中を押してあげていたということを思い出した。子育ての時期は子育ての本を借りて、幼稚園に入れば弁当の本、小学校に上がる時はかばんやエプロンの作り方など、子供の成長と一緒に図書館があった気がする。今後、図書館を思ったとき、「あったらいいな」が叶う場所が図書館であってほしい。今ある図書館の思い出も含め、新しい図書館もたくさん思い出を作っていける、小さい頃、子どもの頃に行った図書館に大人になって、親になって、懐かしいなあって思える場所ができたらいいと思う。

(副市長) 思い出の場所になれるにはどうあったらいいのかというお話だった。

(委員) 小学校で読み聞かせのボランティアをしている。これからの時代は大人になっても学び続けるし、たくさんの居場所が大人にも子供にもほしいと願っている。居場所があって初めて人は自立できると信じているので、場所が転々とたくさんあることが大事だと感じている。鶴岡市にはそういう場所が非常に少ない。コーヒーショップはお金を払わなければ居られない。道路から見られてしまうタクトの学習場、最近出来た第三コミセンの学習の場は、高校生の利用がメインで大人は学習ができない。学びたいし居場所がほしい。いろんな人と交流できる、出会う仕掛けが、お金をかけなくてもできるのではないかと感じている。そのための知恵を皆さんと共に引き出して、地に足の着いた図書館ができたら素敵だと思う。鶴岡は、食べ物もおいしいし、作家もいっぱいいるし、図書館もいいから、是非寄ってほしいと言えるようになればよい。

(副市長) たくさんの居場所は、ものすごく説得力のある言葉だと思う。

(委員) 自分は古典文学が専門で学生に教えている。高校の授業で出会い、仕事にしたいと思い図書館に通い、文学部に進んで今に至っている。学生たちにも読んでほしいが図書館は敷居が高いと思っている。親自身が図書館に慣れてないと子どもを連れて行かない。子どもも図書館に行かなくなるという循環なので、今の高校生世代に図書館の良さや面白さを伝えたら、彼らが親になった時、子どもたちにとって図書館が親しみ深い場所になるよう、教育機関に勤めている者として関わっていきたいと思う。

自分には小学校低学年の子供が2人いて、図書館をよく利用していたが、子どもたちが館内で騒いだとき、図書館側の対応で悲しい思いをしたことがあり、図書館に行かなくなった経緯がある。母親としては連れて行きたいけれど行けなかったという思いも生かせたらと思う。自分の経験を踏まえた上で、今の高校生が親になった時に良いと言える図書館を、一緒に考えたいという思いがあって、今回、委員を引き受けた。

(副市長) 敷居が低くすること、また親子で過ごせるかも皆さんと議論していきたい。

(委員) 地元の企業に就職して休日等を利用して若い人たちで集まり、朝日地域を盛り上げていくグループの会長をしている。地域の情報や動画を、地元の観光協会と協力しながら発信している。新しい図書館が自分たちの活動を市民の方々に知ってもらう場所になればいいと思っている。市全域がこれだけ大きい面積になると、この地域のことをもっと知ろうとしても、現地には足を運びづらいこともあるので、各地域の特色や、どんなことが行われているか、新しい図書館の中で知ってもらえる場所を設けてもらいたい。そうすれば、今の若い人たちも、鶴岡では昔からの行事とか、自分の住んでいる地元の誇らしさとか、そういったものに気づけるのではないかと思う。

(副市長) 図書館が鶴岡を発信して発見する場であればいいと思う。

(委員) 鶴岡を 10 数年離れて、U ターンして現在、温海地域で活動しているが図書館は本を借りるという目的があれば行くが、それ以外で行くきっかけがない。本が借りる以外で行きたいと思えるきっかけがないと行かない。山崎先生から、多機能集中型の図書館を紹介してもらったが、例えば調理室があれば、絵本に出てくる何かを作ってみる、という感じで利用できるのではないか。子供がいなくても楽しめる可能性を秘めた図書館設計にして、後はもう住民の人たちが育てていく余白やノビシロのある図書館ができたなら、ワクワクして行くのではないか。大人や子ども、高校生など、いろんな世代で使い方を提示できれば、子供が大人になっても、長く使う図書館になると期待している。それから、温海分館について、来館者数や貸出者数は多いが、施設の面積が大変小さいという現状である。新しい図書館を考えていく上で、分館についても、一緒に考えていければと思う。

(委員) 鶴岡の出身で大学生。自分の望む図書館像は、全世代のサードプレイスのような空間となること。いろんな地域活動に参加して教育の多様性が足りないと感じている。学校に通えない子たちがいて、そういったマイノリティな子たちの教育を支援する場所を図書館で実現できれば市としても教育の多様性が目指せると思う。

もう一つ、複合施設として若者目線から言うと、図書館に魅力的なカフェやお店があるとワクワクした気持ちで行きたくなる。ミーティングスペースや市民の方が自由に使えるフリースペースを置いている図書館の事例もある。そういう場ができれば鶴岡の企業も活用して、交流の中でいろんな可能性が生まれるのではないかと思った。

(副市長) 今の図書館は子どもと高齢者の利用が多いが、その間の世代の利用が少ないという話だった。今の話はこの課題を解決するヒントになると思う。

(委員) 「開かれた図書館」という話があったが、それはみんなで作り上げた市民のものになっている建物であり、その中身が必要だろう。自分が鶴岡に来たとき、図書館の主催で学校の先生方が自分の専門分野を教える講座があった。どこにどのような人材がいる

か、あの方のところ行けば、これを教えてくれるという人の存在を知り得た講座を図書館が主催してくれたことが、この地域に親しめた一つの要因であった。いろんな人材のところに光が当たる講座を考えてもよいのではないか。今、学校の先生方の「働き方改革」が進行しているが、その一方で、「学び方改革」という考え方も組み入れてもらいたいと願う。

鶴岡は400年間、大きな災害や戦災がなかった城下町である。古文書がたくさん残っているが流出している。やはり過去から学び、学んだ知恵や文化を定着できる図書館であって欲しい。資料館は、図書館と密接した鶴岡の学びの基本だと思っている。そこを大切に作る図書館であって欲しい。

(副市長) 本を通じて人を発見、グループを発見という話があった。

(委員) 自分が新図書館で大事にして欲しいキーワードは「つなぐ」ということ。教育長が挨拶で、地域産業の支援という話あったが、それも「つなぐ」だと思う。具体例として二つ挙げると、一つ目は、「分館と本館をつなぐ」ということ。各分館の取り組みは非常に工夫されている。ただ、本館になかなか来られない地域の方のためにも、今まで以上に、新図書館の本館と連携した分館の活動の充実が、現役世代の活用にも繋がってくるのではないか。

二つ目の「つなぐ」は、幼小中高も含めての教育機関との連携である。現在、鶴岡市内の小学校は小規模校にも図書館職員が配置されている。学校図書館に子供と本をつなぐ人がいて、日々の学びが充実することは素晴らしいことだと思っている。

朝陽一小の当時の竹屋校長が『こうすれば子どもが育つ 学校が変わる 学校図書館活用教育ハンドブック』(国土社 2003年)『図書館をつくる教育を変える～鶴岡市立朝陽第一小学校の図書館活用教育』(全国学校図書館協議会 2004年)という本を出されて全国に発信したところ、たくさんの方が学校図書館の視察に来た。それが引き継がれて、視察が余りにも多かったので「図書館活用教育を学校経営の中核に据え、心豊かな生涯学習を育む」という冊子を作り有料で参加者に配布するほどだった。こういった経緯があり、鶴岡市の学校図書館が非常に充実しかつ全国に発信し注目される、伝統ある図書館活用教育ができていると思われる。小規模校の学校を含め、新図書館と学校の繋がりが一層大事にしていってもらえればありがたい。今後とも、「つなぐ」をキーワードに、図書館の役割をさらに考えていきたい。

(副市長) つなぐというキーワードで幼少中高、それから文化会館、学校図書館のつながり、色々な観点からお話をいただいた。

(委員) 教員をやっていたので、本を読むことがいかに学力を上げるかという事例をたくさん見てきた。本が嫌いな子もたくさん見てきたが、読みたくない、読めないお子さんこそ、きっかけを与えると読めるようになり比例して学力も上がり学校が好きになるこ

とも確信してきた。特別支援教育でも子どもたちと接してきたが、読み聞かせをすると身乗り出して、きらきら光る眼をする子供たちを見ていると本には力があるなど。力のある本が図書館という建物に山ほどあるのに近寄れないのは大人の責任だと思っていた。教員を辞めてから子育て支援ということで講話をしてきた。実は本が子育ての教科書であり、本の中に子育てのヒントが隠れている話をすると、親たちは涙を流したり身乗り出したりして、自分の子育てに生かそうとする。きっかけさえあれば、みんな本に親しんでくれることを肌で感じてきた。

新しい図書館は、すべての人の居場所になる、キッカケを作る基地、発信の基地・受信の基地となる建物であって欲しい。そこからキッカケを得て、子育てをがんばろうとか、勉強をがんばろうとなってくる。鶴岡を離れて戻ってきた時も本や情報を交換できる交流の基地として図書館が位置づけられているというイメージを抱いている。「すべての人」と表記した場合、どういう人を浮かべるのかも、重要だと思う。本の好きな子は黙って読んで読むが、本に近寄れない子ども、大人も含めて読みたくないと思っている人達。一人暮らしのお年寄りや支援を要するような人たちにこそ、きっかけを与えることができ、喜びを得られるような図書館にしていきたい。

(副市長) きっかけを与えると読めるという話は、非常に説得力があった。それからすべての人の交流の基地という考え方も大切だと思った。

(委員) 図書館に併設されている鶴岡市郷土資料館をどうするかも検討する必要がある。

昭和51年に当時の市長の肝入りで設置された資料館だが、その経緯を知っている者として、郷土資料館に絞って話題にしたい。鶴岡には様々な文化遺産が残っている中で郷土資料館は古文書などの文献資料を取り扱う専門の資料館となる。古文書をはじめ、郷土の資料となる文献を収集保存するという専門の施設であり、これは長年の職員の努力もあり、全国的に高い評価を得ていると思われる。

現職の頃、出張先の博物館の学芸員や大学の先生に会うと、鶴岡の郷土資料館は資料をきちんと保存して、調査に際は色々と言ってくれる。そのような専門の資料館がありうらやましいとよく言われた。資料館を立ち上げた方々に先見の明があったと思っている。

鶴岡市史は通史の他に、史料集を刊行しており郷土資料館の設立当初から、連綿と刊行してきた。郷土資料館が事務局を担当し、市史編纂会と一体になって刊行してきており、現在も作業を進めている。地道な事業だが、特筆すべきことだと思っている。現在は設立時と相当違っているが、当初の理念とか、郷土の文献資料の調査・収集・保存・展示し活用する施設という大きな方向性は、大事にしてもらいたい。

(副市長) 改めて鶴岡市の図書館、郷土資料館の評価についてお話を伺った。鶴岡市の図書館の大きな特徴だと思う。どう生かしていくのか、今後議論をしていきたい。

(委員) 子育て中に図書館で嫌な思いをしたので、ガラス張りで仕切られた読み聞かせの部屋や、高校生の勉強スペースを大きく取ってもらいたい。文化会館とアートフォーラムが並んでいて、その続きで図書館をつくれば、住み分け連携ができると思った。文化会館で勉強している子どもたちが図書館に来て、文化会館は照明をつけるとガラス張りなので、ダンスや楽器の練習ができて高校生の居場所となる。また、隣のアートフォーラムは、展示室がメインだが、朗読会もできれば読書会もできるスペースがある。

ところが、資料をもらい山崎先生の DVD を見て、世の中が変わったのを実感した。デジタル化、データベース化が進み図書館の存在意義が問われる時代であり、少子高齢化、人口減など住みづらい世の中になってきた。そういったことを克服するため、全国的に複合施設として建て替えされた事例がある。人材を育てなければいけないし、どんな機能を持つ施設を置くのか、綿密に計画を立てる必要がある。子供も大人もそこに行けば誰かと出会いお話ができる、交流できる施設というのが一番だと思う。これから市民と行政が一体となって、どのような複合施設、みんなが楽しめる、生きていく糧となるもの、子供にも高齢者にもやさしい施設を考えてもらいたいし、自分の中でもまとめていきたい。

(副市長) 図書館は本当に多様な活用、付加価値のつけ方、そして人との出会い、図書館に求める部分は様々だと思った。

(委員) ニュージーランドから 2 日前に帰ってきた。ニュージーランドのある街の図書館について個人的に良かったことを話したい。街の中心に大聖堂があり、図書館はその真向かいにあった。観光客やショッピングを楽しむ人々が気軽に立ち寄れる場所で、出入口も 3 箇所ほどあり、ガラス張りで中が見える。私は図書館に行く予定はなかったが、カフェが見えたので入ったら、実はそれが図書館だった。その図書館は観光客やちょっと一息つきたい人にとっては敷居が低く感じられる立地であった。

現在の鶴岡の図書館は中心部から少し外れており、図書館へ行く意思がなければ訪れることはないと考え。しかし、新図書館の立地が鶴岡市の中心部であり、観光客が気軽に立ち寄れるようなオシャレなカフェ等が図書館に併設されていれば、現在の 1 日当たり約 500 人の来館者が 10 倍に跳ね上がる可能性もある。

私にも子供がいるため、いくつかの図書館で叱られた経験があるので、図書館は怖いイメージがある。しかし、ニュージーランドの図書館は活気があり、静かにする必要がないように感じられた。大学生が議論をしたり、高校生が雑談したり、スマートフォンで音声付きの動画を観ていた。2 階はすべて子どもの遊び場スペース兼子ども用の図書スペースとなっており、子どもたちが走り回っても親たちは注意せず、クッションが用意されるなど安全面にも配慮がされていた。親たちは子供を見ながら互いに会話を楽しんでおり、静かにするという概念がなくむしろ交わることを促進されていると感じた。一方で、静かに集中したい人のためには最上階にクワイエットルームが用意されており、多くの人に門戸が開かれていた。

日本の一般的な図書館は木製の机が並んでおり、読書や勉強に集中する場所というイメージがあるが、ニュージーランドの図書館では丸テーブルや椅子がところどころにあり、パソコンで作業をする人や充電をする人のためにパーソナルスペースが保たれている。

図書館内には外国語のコーナーが充実しており、日本語の図書コーナーの前でマンガについて話している若者たちに声をかけてみたら盛り上がった。これは館内の外国語のコーナーが充実しており、自由な会話が許されるような開かれた環境だからこそ、外国人である私でも地元の人々と繋がることができたと思っている。

また、ニュージーランドでは、英語が主に使われているが、先住民の言語であるマオリ語も重要視され、あらゆる場所で英語と共に表示されている。先住民の文化も大事にされている印象を受けた。鶴岡でもこれを取り入れるのであれば、図書館内のトイレなどの全ての標識に庄内弁も併記することで、地域文化の維持と伝承に貢献し、子供たちの言語教育にも良い影響を与えることが期待できると感じる。

(副市長) 行きやすい居心地のいい図書館について実例を出していただいた。

4、コメント

(1) 市長

多様な意見が出たと思う。繋いでいくという話でそれは歴史的なものや分館とか、学校図書館とかを繋いでいく、という考え方は非常に大切だと思った。

引き継ぐべきものは引き継いで、どう変える、というよりは付け加えるかという議論になっていくと思う。委員の方々からも図書館は静かな場所なのか、子供たちが騒いでいても、それを受けとめていく場所なのか、分ければいいという議論もあるかもしれない。図書館の考え方も変わってきていると改めて思った。そして、図書館に新しい役割が求められていることは、大いに検討していかなければいけない。読むきっかけをどうするかと話もあった。改めて様々な方々、本なんか読まないと思っている方も含めて、どうきっかけを作っていくのかは、大事なことだと思った。

この議論に入る前に図書館に行き閉架書庫にも見たがとても手狭に感じた。郷土資料も保存が大変だと感じた。是非委員の皆様にも現状を見ていただきたいと思う。現在の建物は約40年頑張っていてこれをリノベーションして使えばいいじゃないかという議論もあるかもしれないが、私はこの際、新しい図書館を市民参画で生み出し、開かれた図書館として作り上げることをやるべきではないかと議論を聞いて思った。

(2) 山崎アドバイザー

非常に建設的で多様なご意見いただいた。図書館は長い歴史の中でいろんな役割を持つようになってきた。鶴岡の図書館も相当頑張っているし結構レベルが高い。ただやっぱり足りないものがこれから出てくる。

一方、国でも地方創生と謳っているがさっぱり変わらない。人口が減少し産業衰退が

起きている。これを打破していくには、何かの工夫・努力が求められ、一番大事なものは地域の主体性だと思っている。アイデンティティと言ってもいいが、国が言う通りに従うのではなく、地域は地域なりに考えていかなければならない。その中で、どう変えていけばいいかとなると、住民の主体性をまず先に確立する必要がある。それは黙って変わらない。場が必要となる。そのためには、是非とも図書館を作らなければいけない。そこには情報もあれば、フィールドがあって、議論を重ねつつ、情報も手に入れて、まず住民が主体的になる必要がある。よく使うフレーズだが、「我」から「我々」にならないといけない。複数の人間が課題を共有化して、集団でそれを変えていくことで、自治体を変えていくことができる。自治体も開かれた自治体に変えることができる。ただサービスを受けるだけでなく、自治体に積極的に働きかけることによって、自治体自体も変わっていき、それがまた個人を変えていく好循環になる。その礎として図書館に、あらゆる世代が集まる場を作ることが大事になっていると感じている。

今日は、色々な提案があり解決できない課題はなかったが、解決するには大変な努力が必要である。これから色々なご意見いただいて私も一生懸命努力して新しい図書館に向けて頑張っていければと思うので、今後ともよろしくお願ひしたい。